

ショーペンハウアーにおける生の肯定

「意志の否定」と自殺否定論

大内 晴絵

1. はじめに

本稿ではショーペンハウアーの思想¹を再構築し、彼の悲観主義の思想を生の肯定とみなす新たな解釈の提示を目指す。

A・ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 独, 1788–1860) は、伝統的に悲観主義の文脈で語られてきた。ショーペンハウアーはあらゆる存在、および世界の本質を非合理的な意志と語る。そして、その意志のゆえに、われわれ人間の生は本質的に、この上ない苦しみに満ちているとする思想がショーペンハウアーの体系の根底にある。

こうした思想はたしかに悲観的である。ショーペンハウアーが知られるようになったきっかけである、Oxenford の論稿では、ショーペンハウアーは「超悲観主義者 (ultra-pessimist)」と評される²。初期のニーチェもまたショーペンハウアーに大きく影響を受けている。彼は『悲劇の誕生』においてショーペンハウアーを「デューラーの騎士」になぞらえる。

伝統的なショーペンハウアー理解は Oxenford やニーチェによる評——特に Oxenford による「超悲観主義者」評——の影響下にあるという指摘がなされている³。Shapshay は伝統的なショーペンハウアー理解が Oxenford による解釈の影響下にあると指摘し、以下のように指摘する。

Oxenford は、ショーペンハウアーの哲学を、何よりもまず、徹底した「ペシミズム」とし

¹ そもそもショーペンハウアーの思想をペシミズムとして理解するべきであるのかという問題が存在する。齋藤 (2007) は、ショーペンハウアーの思想が連想ゲーム的にペシミズムと読まれるようになった原因を、彼の著作がブームとなった 1850 年代の、革命破綻後の閉塞感に求める。Migotti もまた、「ペシミズム」と「オプティミズム」が西洋哲学史において比較的新しい言語であることを指摘する。特にペシミズムはオプティミズムへの反動として、ライプニッツの最善律を批判するショーペンハウアーの哲学体系と結びつけられながら成立したとしている。

² John Oxenford, “Iconoclasm in German Philosophy” in Westminster Review (1853).

³ Sandra Shapshay は自身の著書において、ショーペンハウアー解釈の悲観主義的解釈への傾きという問題を指摘し、是正を試みる。Shapshay はショーペンハウアーの倫理思想の中核である「共苦 Mitleid」論の再構築を通じて、彼の思想に従来の悲観主義とは異なる「希望」の思想を見出す。さらに、Shapshay は、再構築し打ち立てた「希望の騎士」像によって、従来の「絶望の騎士」像が払拭されるのではなく、ショーペンハウアーの思想にはこの 2 つの像が同時に併存しているものと読むべきであると主張する (Shapshay, 2019, pp. 11–35)。

て組み立てている。彼はこの論考の後半で、ショーペンハウアーのより希望に満ちた共苦の倫理について論じており、そこでは善人は他者の苦悩を和らげようと努力する。しかし Oxenford は、ショーペンハウアーが理想とするのは共苦の人ではなく、むしろ「目に見える世界とわれわれをつなぐすべての感情を徐々に消滅させること (asceticism)」であることを強調する。これがショーペンハウアーの完璧な姿である」と述べ、ショーペンハウアーの体系を「超悲観主義」(407)と呼んで結んでいる。ヨーロッパのエリートたちにショーペンハウアーを紹介した Oxenford の影響力は、確かにショーペンハウアーを近代的進歩の敵として、「人間嫌い」で「超悲観主義者」であるとするものであった。(Shapshay, 2019, p. 15)

つまり、伝統的なショーペンハウアー理解は、実際のショーペンハウアー哲学の姿のうち、その悲観的な側面を重視しすぎている可能性がある。ショーペンハウアーの体系は多くの矛盾を孕んでいることはこれまでも多く指摘されてきた。このようなショーペンハウアーの思想をよく理解するには、これまでは着目されていなかった、悲観的な側面に覆われていた部分も明らかにする必要がある。

本稿ではこうした、ショーペンハウアー理解の悲観主義偏重という事態への問題意識を引き継ぐ。そして、ショーペンハウアーの思想において救済として目指されている意志の否定論に希望を見出しうるのかを検討する。具体的には、世界の本質とされる「意志」を否定することは必ずしも実体的な人体の死や世界の消滅を指すのではなく、「意志」そのものへの根源的な態度の変容であるという点に着目する。そして、この「意志」に対する根源的な態度の変容がひとつの生の肯定の在り方であると主張することを試みる。

本稿の中心的主張は次のようなものである。すなわち、ショーペンハウアーの「意志の否定」は、従来暗黙裡に理解されてきたような生の否定ではなく、個体的な執着を超えた新たな「生の肯定」である。この主張を論証するために、本稿では意志の否定と自殺との対比に着目する。自殺が苦しみからの逃避であり、また逆説的に意志の強烈な肯定であるのに対し、意志の否定は苦しみを受容しつつ内面的充足に至る肯定的な態度である。この対比を通じて、意志の否定を通じた生の肯定の独自性が明らかとなる。

本稿の次節以降の構成は以下の通りである。まず「意志の否定」や悲観的思想の根底にあるショーペンハウアーの世界観（「意志」と「表象」としての二元的世界観）、悲観主義、意志の否定がいかなる事態を指すのかを、主著である『意志と表象としての世界 正篇』から確認する(2)。そして、意志の否定とは全く異なるものとして強調される自殺論を紹介する(3)。そして、これら意志の否定と自殺との差異から、「意志の否定」に見ることができる「生の肯定」について検討する(4)。

2. 意志と表象——意志形而上学

本節ではまず、ショーペンハウアーの意志形而上学を確認しておく。彼の「意志の否定」論や悲観的思想は、意志を中心とするこの形而上学を基礎としている。同時に、本稿が後に論じる「意志の否定」や、「意志の否定」に生の肯定が見出される理由を理解するための基盤となる。特に意志についての理解、意志が実体ではなく生への衝動であること、そして意志の否定において、否定の前に意志が完全な現象を前提とすることは、意志の否定に見出される生の肯定を理解する鍵となる。

ショーペンハウアーはカントの二元的世界観を引き継ぎ、世界を表象 *Vorstellung* と意志 *Wille* からなるものとする⁴。これら世界の二側面は切り離せないものとなっている。表象は、我々が普段経験する可知的な世界である。表象としての世界はカントで言うところの現象界に近い。表象の世界は、時間と空間という「個体化の原理 *principium individuationis*」に支配され、事物は時空的に位置づけられることで個性を帯びる。対して、事物の本質として、表象の背後には物自体としての意志が想定されている。意志は不可知的なものである。さらに、この意志は究極的な目標や目的が無く、生へ向けて非合理的に事物を駆り立てる。そのため、事物の本質である意志は「生への意志 *Wille zum Leben*」とも呼ばれる (*W1*, 380)。

表象と意志とは、認識の主体である個人の身体において接点を持つ。身体は外側から認識の対象とされる点で表象であると同時に、内側から直接的に知られているものとして意志でもある。表象は意志が客体化した世界であり、意志は分有されたり分割されたりはせず完全な状態で現象する。この身体の二重性は、ショーペンハウアーの形而上学において特に重要である。

自らの生きた身体の維持を最優先事項とする生への意志の現象は、必然的に苦しみを伴う。というのも先述の通り、意志は最終的な目標がないため、最終的な満足のようなものは得られない。また、意欲は常に欠乏から生じるため、意志に駆り立てられるがままに意欲する限り苦しみは不可避である。仮に意欲が一時的に充足されても、その満足は長続きしない。新たな意欲が現れなければ退屈が訪れる。退屈もまた、恐ろしい苦しみであるとショーペンハウアーは述べている。したがって人生は「苦しみと退屈の間の往復運動」であり、実質的にはある苦痛からまた別の苦痛への移行を無限に繰り返している。さらに、幸福は苦痛の一時的な不在として消極的に論じられる。幸福は人生に対して派生的に述べられるに過ぎない。

以上から、ショーペンハウアーの悲観主義の結論が導かれる。すなわち、存在よりも完全な非存在のほうがはるかに望ましいというものである。楽観主義に対して、今あるこの世界は想定しうる限りで最悪の世界であるとショーペンハウアーは述べる。

⁴ ショーペンハウアーにおける「意志」という語の用いられ方には注意が必要である。彼が「意志」という語を用いるとき、我々が日常生活において何かを意図したり目的にしたりするような意味での用法では用いていない。あくまでも事物の背後にある物自体として、生命へと向かって事物を駆り立てる衝動のようなものとして考えられている。そのため、本稿で用いている「意志」も、日常的な意味でのものではなく、ショーペンハウアーの示している物自体として想定されているものを指している。

こうした悲観主義からの脱却として、ショーペンハウアーは主著『意志と表象としての世界』の後半で美学（第3巻）と倫理（第4巻）について述べる。本稿では後者の倫理について扱う。この中心となるのはやはり意志の否定という禁欲的で諦念的な態度ということになる。

まず重要なのが、悲観主義によって確認された生の苦しみからの脱却は、自殺によっては達成されないということである。自殺は個別的な一現象（表象）の破壊にとどまり、その本質である意志を否定しない。苦しみが生に本質的なのは意志に由来するからであった。そのため、一個体の破壊では根本的な解消とはならないのである。この点については、次節において改めて詳細に確認する。それでは、真の脱却とはいかにして可能であるのだろうか。ショーペンハウアーが想定している答えはおそらく「意志の否定によってなされる」であろう。

そのうえで、意志の否定が成立するためには、まず生への意志が完全に現象する必要がある。意志は自己認識によってのみ己を否定することができるようになる。そのためには、意志が認識の対象となる形で、つまり表象の世界の内に完全に現象する必要がある。したがって、生への意志が完全に現象することは意志の否定のための前提条件となる。

意志の自己認識とはいえど、意志は客観として認識の対象となり得ない。そのため意志は表象の世界を鏡として自らを認識する。通常、我々は个体化の原理に支配された表象の世界において事物を個別的なものとして認識する。こうした個別の諸現象に惑わされず世界を認識すること、すなわち个体化の原理を突き破って見ることで、自他の区別が幻想であり、個別に見える事物の本質は同一の意志であることを認識する。この認識が、今度は意志の鎮静剤 *Quietiv* として作用し、それまでの意志の激しい意欲を抑える働きを見せるようになる。

こうして目指される意志の否定⁵は、実体の消滅を意味するものではない。そもそも物自体として想定されていた意志は実体ではないため、その否定は実体としての人間や世界の消滅を意味しない。意志の否定はむしろ「非意欲」という能動であると説明される（PP2, 368）。つまり、それまで意欲していたものをあえて、能動的に意欲くしない>という事態である。したがって、意志の否定が意味するのは単なる世界の消滅ではなく、世界との新たな関係であるといえるだろう。ショーペンハウアー自身が指摘するよう、意志の否定の後では認識だけが残り、意志も表象も、世界もない。しかし、ここでの「ない」は絶対的な無ではなく、相対関係において規定される無である。つまり、意志の否定によってなくなるとされている世界とは、意志の *Motiv* としてのものであり、意志の *Quietiv* となる認識を支える世界ではないと考えることができる。

⁵ 意志の否定への道には2つの道がある。苦悩についての認識によって意志を否定するに向かう道が第一の道であるが、しかしこの道を辿るものはごく少数である。多くのものは第二の、より劣った道を辿る。第二の道では、苦悩を自らが直接に経験する。甚大な苦しみを経験することで自然と生への意志が否定されるに至る。どちらの道を通っても、意志の鎮静剤となるような認識を得て諦念へと向かう。

3. 自殺論

本節ではショーペンハウアーの自殺論を検討する。ショーペンハウアーが強調するよう、自殺が意志の否定とは全く異なるものであることを確認することで、次節でみる意志の否定の独自性がより明確になる。自殺は苦しみを嫌悪し個性性に執着するのに対し、意志の否定は苦しみを受容し個性性への執着を離れる。この対比が意志の否定を「生の肯定」として理解する基盤となる。

まずは主著正篇第 69 節および『余録と補遺』所収の「自殺について」という論考をもとに、ショーペンハウアーの自殺論の概略をまとめる。第一に押さえておきたいのは、先述した通り、ショーペンハウアーは自殺について否定的な立場にいるということである。

ショーペンハウアーは主著正篇第 4 巻において、意志の否定へと向かう倫理学を論じている。第 68 節までで、個体化の原理を突き破って見ることで、すなわち表象の世界における諸現象ではなく世界の本質を認識することから生じるもの、つまり積極的な正義、人類愛、意志の否定が順に生じてくることを論じ、意志の否定についても説明される。意志の否定は現象の中に現われてくる意志の、唯一の自由な行為であり、「超越的な変化」に喩えられるものであると説明される (W1, 541)。ショーペンハウアーによると、意志の否定の本質は「苦悩の嫌悪ではなく、人生の享樂を嫌悪するところにある」 (W1, 541)。

こうした意志の否定は、苦しみからの逃避としての通俗的な自殺とは厳密に区別される必要がある。これらの差異について、ショーペンハウアーは以下のように述べる。

〔意志の否定は、〕自らの現象を恣意的に廃棄することにほかならない自殺とは区別されるものである。これは意志を否定するつもりはさらさら無い、より強烈な意志の肯定のひとつの現象である。なぜなら否定はその本質を、人生の苦悩の嫌悪の内ではなく、人生の享樂の嫌悪の内には有するからである。自殺者は生を欲しており、ただ彼のいる状況に満足しないというだけである。それゆえ彼は決して生への意志を放棄するのではなく、むしろただ彼個人の現象である生を破壊するだけである。彼は生を欲しており、身体が邪魔されないで生存することと肯定を欲している。(W1, 541)

第一に、自殺は単に個別の一現象の破壊に留まり、意志を否定するには至っていない。これがショーペンハウアーの自殺否定論の核心となる。自殺者はその現象の、偶然な諸環境によって、自らの身体生存の維持、あるいは快適な生存維持への努力が阻まれる。現象の一個体である認識の主体、つまり「私」にとって身体は客観となるという点で表象であるが、しかし同時に直接に知っているという点で意志の直接の現れでもある。

そしてこの身体を、自殺者は自らの行為によって消滅させることによって、自らが苦悩に打ち砕かれてしまうことから逃れようとしている。生に本質的な苦悩を嫌悪するが、少しでも快

適な生存への意欲を中止できないがゆえに、自らの生という一現象を破壊する。つまり、自らを破壊することによって、かえって強烈に意志を肯定する。

さらに、ショーペンハウアーは心中のような事例にも言及する。親が自殺する際、遺される子どもの将来を憂い、子どもを殺してから自殺するという例があげられる。この場合、親は利己心から子どもを殺すのではなく、親にとっての利益は関係なく、子どものためにと思っとなされる殺人と自殺であるとショーペンハウアーは論じる。しかし、この事例もまた、意志と現象についての誤った思い込みのもとに行われているとしている。「親」や「子ども」といった現象を無くしても本質を消滅したことにはならず、生存の悲惨さから救い出すことには繋がらない。加えて、避妊や中絶、嬰兒殺しによって、子の人生の苦しみを退けようとするにも同様の批判を向ける。生への意志が存在している以上、意志を廃絶するのは認識によってのみなされるのであり、物理的な手段によってはなされないとショーペンハウアーは主張する。

ショーペンハウアーに基づく、本当に救いをもたらそうと思うのなら、初めから苦しみを物理的に無かったことにするのではなく、むしろ生への意志を完全に現象させ、その肯定から生じる苦しみを正面から受入れなくてはならない。何物にも邪魔されないで現象することで、意志は自らの本質をこの現象の中に認識することが可能になる。この認識によって意志は自らを止揚したり、現象と切り離せない関係にある苦痛にケリをつけたりすることができる（W1, 543）。

以上で見てきたショーペンハウアーの自殺否定論の根拠は以下の3点にまとめられる。

- ① 自殺は物自体である意志を否定しておらず、個別的な一現象の破壊に留まる。
- ② 自殺はむしろ強烈な意志の肯定の現れである。
- ③ 自殺が回避しようとした苦しみこそが意志の否定の前提条件として不可欠のものである。

一方で、通俗的な自殺とは異なる自死として、自発的な餓死が指摘されている。この餓死は通俗的な自殺とは異なり、意志の否定の先に行き着いたものとされる。生への意志が完全に否定され、個人が生き残るための必要な栄養摂取さえもなくなった果に迎える死である。

こうした餓死と通俗的な自殺は、生への意志への態度によって本質的に異なるものとなる。自ら死を迎える点で共通しているこれらの事例を分ける要素として、Jacquette (2000) やハウスケラー (2004) は「無関心」の状態を指摘した。しかし、これはあくまでも外面的にそう見えるという記述に過ぎず、内面の特徴を見落としていると田代 (2019) は指摘する。以下は意志の否定に至った者の内面の特徴に関する記述である。

生への意志の否定が開いた人の場合、外側から見ればとても貧しく、喜びもなく、まったくの欠乏の状態にあるように見えるが、しかしその内面は完全な喜びと真の天上の平穏とがある。それは、人生を楽しむ人々の変化を成すような、激しい苦悩を前や後に必ず条件

づけるような、不安定な生の衝動や歓喜の喜びではなく、揺るぎない平和であり、深い平穏と心からの朗らかさである。(W1, 529-530)

意志の否定者は「無関心」のような、外から見た印象とは裏腹に、その内面はこの上ない穏やかさと喜びに満ちている。自殺と意志の否定の差異を考える上でこの点が重要であり、意志否定者はただの無関心の状態にとどまらない状態であると田代は主張している。さらに、世界の有り様をあるがままに認識し、肯定している(受け入れている)からこそ、意志否定者は表象から離れるとしている。つまり、意志を否定するものは世界のあるがままのあり様に心から満足し、それゆえに意志の個別の現象への執着を離れ、世界のあり様を変えようとして諸現象に働きかけまいとする。このとき、意志を否定するものは個人の生死という、一現象に過ぎないものへの関心や執着を離れていると考えられる。

4. 生の肯定

最後に、ショーペンハウアーが自身の著作において「生の肯定」を問題としていると考えられる根拠を確認しておく。以下は主著における記述からの引用である。

生の重圧に圧迫され、たしかに生を望み肯定してはいるものの、しかしその苦しみを嫌悪し、とりわけそのとき自らに降り掛かっている厳しい運命に耐えられない人、そのような人は死によって救済を期待することは出来ず、自殺によって自らを救うこともできない。(W1, 388)

これら〔意志の否定・肯定〕はまったく知られておらず、また一般的な表現では理解しがたい概念は以下の現象の記述、すなわち、ここでは、一方では様々な度合いの〔意志の〕肯定において、他方では〔意志の〕否定において現われる行動様式についての説明から、ただちに明らかとなると期待して良いだろう。というのも、たしかに両者は認識を根底としているが、しかしそれは言語によって表現される抽象的な認識ではなく、行為と変化によってのみ表現され、抽象的な認識として理性を占める教義から独立した、生きた認識である。〔中略。私が目的とするのは、意志の肯定および否定を明晰に説明することであり、どちらかを指図することではない。また、意志は全く自由である。意志の肯定と否定の議論に立ち入る前に、この自由と必然の関係について先に論究し、規定しておく必要がある。〕さらにはまた、生の肯定ならびに否定が我々の問題であり、この生について、意志とその客体とに関係するいくつかの一般的な考察を行う。(W1, 393-394)

ひとつ目の引用が示すように、「生の重圧に圧迫され」ることと「生を肯定」することは両

立可能である。前節までも確認した通り、生にとって苦悩は本質的である。そのため、生を肯定するに当たって、その本質である苦悩を受容することは矛盾しない。逆に、生の苦悩を嫌悪しながら、苦悩のない生を欲することは矛盾した態度であると考えられる。ここから、苦悩を受容しつつ生を肯定するとはいかなる態度であるのかという問いが生じてくる。

ところで、そもそも「生の肯定」という問題はショーペンハウアーの体系において重要なものなのだろうか。ふたつ目の引用はこの問いに答える。主著第四巻は、それまでに展開した悲観主義的な世界を克服しようと試みる最終部に当たり、意志の否定論もこの第四巻において展開される。そしてショーペンハウアー自身が、「生の肯定ならびに否定」が問題だと明言している。つまり、意志の否定論に見出されるのが生の肯定であるのか否定であるのかという問題は、彼の哲学全体において重要であると言えるだろう。

それでは意志の否定に見る「生の肯定」とはどのような態度であるのか。本稿ではこれを以下の四つの観点から検討する。第一に、意志の否定が実体的な世界の消滅ではなく、態度の変容であること。第二に、苦しみの拒絶ではなく、受容であること。第三に、単なる諦念ではなく内面的充足を伴うこと。第四に、世界からの逃避ではなく、世界のあるがままの肯定であること。これら四つの特徴が特に、意志の否定を「新たな生の肯定」として特徴づける。

まず第一に、意志の否定は実体の否定ではなく、能動的な態度の変容である。意志が実体を想定したものではないことは先述した。さらに、意志の否定はひとつの能動であると説明される。

私はある種の愚かな異議に対して次のように応える。すなわち、意志の否定とはけっして実体の否定を意味するものではなく、ただ非意欲という能動を意味するに過ぎない。これまで意欲してきた同じものが、もはや意欲しないのである。われわれはこの存在、つまり物自体としての意志をただ意欲するという能動の中あるいは能動を通してでしか知ることが出来ないので、この意志がその能動を放棄してしまったあとでは、さらにそれがなお何であり何を駆り立てるのかということを行うことも理解することも出来ない。そういう意味で、意欲の現象である我々にとってこの否定は無への移行なのである。(PP2, 368)

意志の否定は決して受動的な態度ではない。これまで盲目的な意志に従うままに意欲していたものを意欲しないという能動である。ここで重要なのは「非意欲という能動」という表現である。意志の否定は単に何もせず諦めるという受動的な態度ではなく、「意欲しない」という積極的な態度である。この引用は後年の著作に収められたもので、それまでに受けてきた意志の否定論への誤った批判への応答にもなっている。したがって、意志の否定は、実体的な世界の消滅ではなく、<「意欲しない」ということをする>という世界との新たな関係の仕方である。

第二に、意志の否定を通じた生の肯定は、生に本質的な苦しみを受容する。繰り返してきた

ように、生にとって苦しみは本質である。ある人がその生を肯定するとき、本質である苦しみを退けて肯定しようとするのは矛盾している。前節で見たように、自殺はその苦しみを拒絶し逃避しようとする。

ただし、意志の否定はただ苦行を目的としている訳ではない。意志の否定にとって、苦しみは意志の自己認識の契機となる。苦しみの経験、あるいは認識を通じて、意志は自らの本質である無限の欠乏と意欲とを認識し、自己を止揚する。苦しみは拒否されるべきものではなく、意志の否定に向かうための必然的な通路となる。そのため、意志の否定によって生を肯定する人は何らかの仕方で苦しみを受容する必要がある。この意味で、苦しみの受容は、生の本質的な在り方の肯定である。

第三に、意志を否定した者の内面は充実している。今一度次の箇所の引用を確認しよう。

生への意志の否定が開いた人の場合、外側から見ればとても貧しく、喜びもなく、まったくの欠乏の状態にあるように見えるが、しかしその内面は完全な喜びと真の天上の平穏とがある。それは、人生を楽しむ人々の変化を成すような、激しい苦悩を前や後に必ず条件づけるような、不安定な生の衝動や歓喜の喜びではなく、揺るぎない平和であり、深い平穏と心からの朗らかさである。(WI, 529-530)

周囲に対して無関心な態度に見える静かさに反して、その内面は喜悦と平和に満ちた状態であると記述される。これは、もはや生への意志によって一々の苦しみや一時的な満足に左右されない状態にあるからである。意志に影響されないがゆえに、その内面の平和は不壊不動のものとなる。これが、意志の否定が単なる諦念ではなく積極的な肯定である理由である。

第四に、最後に意志を否定するものは世界のあるがままを肯定する。田代が指摘するように、意志を否定する者は、世界のあるがままの状況を受容する。そしてその世界に変化を加えまいとするので、意志の個別の諸現象から離れていく。自殺は一現象を破壊することであった。そのため、個別のひとつの現象の破壊は世界に変化を加えることになる。世界のあるがままに肯定する者は、世界に変化を加えまいとするために、自ら死を選ぶこともないのである。

以上の四つの観点から、意志の否定における生の肯定の特質が明らかになった。この意志の否定を経た生の肯定を「新たな生の肯定」と呼ぶと、生の肯定は以下のような二階層のものとして理解できる。第一の階層である、意志を否定する前の生の肯定とは、個体的な生存に執着し、つまりできるだけ意志を妨げないように生きるという態度である。すなわち、生への意志の要求に沿って、意志に駆り立てられるままに生きるという態度を指す。意志の本質は無限の意欲と欠乏であるため、このような態度は必然的に苦しみをもたらす。一方で第二の階層である、意志が否定された後の肯定では、個性を超えた肯定となる。つまり、自らの個体の生存維持への執着から解放されている。そしてこれは単なる諦念ではなく、内面の充足を伴う積極的な受容である。これは生に本質的な苦しみをも含んだ、世界全体の肯定である。

ここで、前節で取り上げた自殺論との対比を通じて、意志の否定の特徴をより明確にしておく。まず自殺は生の苦しみを拒絶する。そして個性性に執着する。さらに逆説的に生存へ執着し、その内面は絶望に満たされている。一方で意志の否定においては、まず生の苦しみを受容する。そして個性性を超越した認識を得て、これが意志の鎮静剤として作用するのであった。さらに、意志の否定は新たな生の様態であることを本稿は主張してきた。そしてその内面は不壊不動の充足の状態にある。この対比が示すのは意志の否定を通じた「新たな生の肯定」の特質である。これは生への盲目的な執着でもなく、生からの逃避でもない、第三の道である。

したがって、ショーペンハウアーの意志の否定論は、従来理解されてきたような単なる「生の否定」や諦観主義ではない。個体的な生への盲目的執着を否定することによって可能となるのは、個性性を超えた、より高次の「生の肯定」である。意志の否定は世界の消滅ではなく、世界との新たな関係の確立を意味する。それは苦しみに満ちた世界のあるがままを、内面的充足とともに受容する積極的な態度である。

5. 結

ショーペンハウアーの哲学は伝統的に「超悲観主義」として理解されてきた。しかし、こうした理解は一面的であり、修正される必要がある。ショーペンハウアー自身も自らの思想を悲観主義とは呼ばなかったことから、悲観主義偏重な理解は正されなければならないだろう。本稿はこの問題意識に立脚し、ショーペンハウアーの思想の中心となる意志の否定に生の肯定を見出すことを試みた。

本稿の論証の流れは以下であった。まずショーペンハウアーの意志形而上学を確認し、悲観主義の根拠を明らかにした。意志は盲目的に生存へと執着し、事物を駆り立てる。生への意志のゆえに、生は本質的に苦しみに満ちたものとして考えられるに至った。次に自殺論を検討し、自殺が強烈な意志の肯定であることを確認した。最後に、自殺との対比をもとにしながら、意志の否定が「新たな生の肯定」であることを論証した。

意志の否定は実体の否定ではなく、意志や世界に対する態度の根源的な変容である。それは、それまで意志が盲目的に意欲していたものを「意欲しない」という非意欲の能動である。意志の否定は苦しみの受容、内面的充足、世界のあるがままの受容を特徴とする。そして、個性性への執着に基づいた第一の階層の生の肯定とは異なり、意志の否定によって個性性を超越した生の肯定とは、より高次の肯定である。

本稿では、意志の否定の特徴を明確にするに当たって、自殺論との対比を行った。ショーペンハウアー自身が自殺と意志の否定は全く異なるものと強調していることから、自殺否定論との対比によって意志の否定の積極的性格は明確に浮かび上がった。

さらに、本稿は Oxenford 以来の悲観主義的解釈の系譜に対する修正に貢献した。これまで生の否定として暗黙裡に理解されてきたショーペンハウアーの思想の核心部分に生の肯定という

肯定的側面を見出すという再評価を本稿では行った。この理解は、ショーペンハウアーの思想に新たな光を当てる。彼の哲学は、Oxenford 以来の伝統的解釈が示してきたような単なる絶望の哲学としてではなく、苦悩に満ちた世界においてなお可能な内面の充足と平和への道を示す思想として読み直されるべきである。今やショーペンハウアーの悲観主義は単なる諦念ではなく、悲観主義を乗り越えて内面の充足と平和への道を示す思想として理解されることが可能となった。

本稿に残された課題は以下である。第一に、共苦の倫理との関係である。本稿では共苦の倫理との関係について踏み込んだ議論を行うことができなかった。そのため、課題の立脚点となった Shapshay との対話は不十分である。Shapshay は意志の否定と相容れないものとして共苦倫理学を再構成し、ショーペンハウアーの体系に希望の側面を見出す (cf. Shapshay, 2019, 18–22)。本稿では、Shapshay において共苦と相容れないとされた意志の否定の側面のみに着目した形となる。第二に、宗教的・禁欲的实践との関連についてもまだまだ明らかとされる余地があるだろう。

最後に、本稿の現代的意義に触れておく。現代社会において、自殺は深刻な問題である。本稿が明らかにしたショーペンハウアーの「新たな生の肯定」は、苦しみの除去ではなく受容を、個体的生への執着ではなく超越を、外的な幸福ではなく内面的な充足を目指す。苦しみに満ちた生において、苦しみから目を背けず、むしろ直視することで可能となる生の肯定の思想は、現代の生の哲学に対して重要な問いを投げかける。ショーペンハウアーの思想を単なる歴史的遺物としてではなく、現代における「生の肯定」の哲学的素材として再構築していくことが今後の課題となる。

凡例

Schopenhauer, Arthur

Werke: *Sämtliche Werke*, 5 Bände, Frankfurt am Main, Suhrkamp (1986)

W1: *Die Welt als Wille und Vorstellung*, vol. 1 (1818/1844/1859), in: Werke 1

PP1: *Parerga und Paralipomena 1* (1851), in: Werke 4

PP2: *Parerga und Paralipomena 2* (1851), in: Werke 5

なお、訳出に当たっては以下の邦訳を参照した

西尾幹二訳. (2004). 『意志と表象としての世界』. I–III. 中央公論社.

有田潤ほか訳. (1972–1974). 『意志と表象としての世界 続編 1–3』. ショーペンハウアー全集. 5–7. 白水社.

有田潤訳. (1973–1974). 『哲学小品集 1–5』. ショーペンハウアー全集. 10–14.

藤野寛訳. (2025). 『自殺について 他四篇』, 岩波書店.

斎藤信治訳. (1952). 『自殺について 他四篇』, 岩波書店.

参考文献

- Jacquette, D. (1999). Schopenhauer on Death. In C. Janaway (ed.), *The Cambridge Companion to Schopenhauer* (pp. 293–317). Cambridge University Press.
- Janaway, C. (1999). Schopenhauer's pessimism. In C. Janaway (ed.), *The Cambridge Companion to Schopenhauer*. (pp. 318–343). Cambridge University Press.
- Migotti, M. (2020). Schopenhauer's Pessimism in Context. In Robert L. Wicks (ed.), *The Oxford Handbook of Schopenhauer* (pp. 284–298). New York: Oxford University Press.
- Shapshay, S. (2018). *Reconstructing Schopenhauer's Ethics: Hope, Compassion and Animal Welfare*. Oxford University Press.
- ヘクト, J. M. (2022). 『自殺の思想史 抗って生きるために』, 月沢李歌子訳, みすず書房.
- ハウスケラー, M. (2004). 『生の嘆き ショーペンハウアー倫理学入門』, 峠尚武訳, 法政大学出版局.
- 板橋勇仁. (2016). 『底無き意志の系譜 ショーペンハウアーと意志の否定の系譜』, 法政大学出版局.
- 齋藤智志. (2007). 「ショーペンハウアーはペシミストか?」, 『ショーペンハウアー読本』, 63, 法政大学出版局.
- 竹内綱史. (2008). 「ショーペンハウアーにおける「生」概念」, 『ディルタイ研究』, 19, 62–79.
- 田代嶺. (2019). 「ショーペンハウアーの餓死論」, 『実存思想論集』, 34, 125–141.